

立教大学 社会学部報

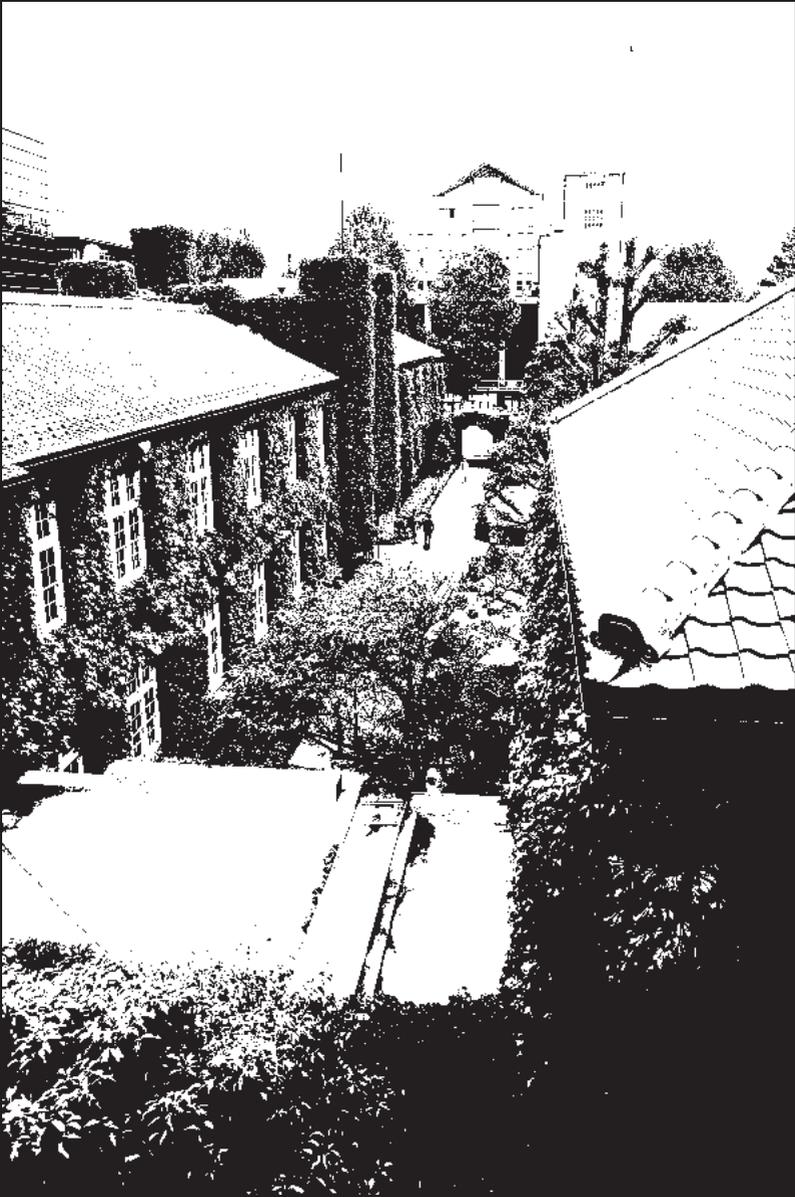
3号

2020



Welcome to College of Sociology

RIKKYO



Sociomagazine Vol.3 2020

社会学部報 第三号 二〇二〇

特集…社会学部ってなんだ？

学部長インタビュー 水上徹男先生 ————— 4

——社会学とは？ どうすればより面白くなる？

社学生の日常 ————— 9

日本各地の社学生 ————— 15

殺人犯が凶悪な姿をしているとは限らない

——映画『テッド・バンデイ』試写会ルポ

留学生コラム ————— 23

社学生課外活動シリーズ①～③ ————— 26

必修授業紹介 ————— 32

退任教員対談①

是永諭×池上賢
安易に語られる「真実」に敏感に

34

——最初で最後の師弟対談

退任教員対談②

田麿先生・前田先生
質的研究と量的研究がわかり合うために

38

退任教員対談③

生井英孝×須永将史
教壇に立つこと

44

——社会という生物なまものに向き合う目を育てる

退任教員インタビュー 松本康先生

49

——「実現不可能でも大きな夢を持ち続けてください」

編集部だより

54



学部長インタビュー

水上 徹男 先生

社会学とは？ どうすればより面白くなる？



社会学はどんな学問で、どうすればより面白くなるのだろうか。二〇一九年度から、社会学部の学部長を務めていらっしゃる水上先生にお話を伺いました。

——これを読んでいる新入生のなかには、社会学が自分に合っているかどうか、どう向き合えばよいか、不安に思っている方も多いかと思うのですが、水上先生はその声はどう応えますか？

私は教員の中でも数少ない、立教大学社会学部のOBです。私が入学した頃、社会学原論の下田直春先生（一九九四年十一月ご逝去）が「社会学は社会学者の数だけある」とおっしゃっていたのを覚えています。ですから、「自分が社会学に合っているか」という不安については、立教大学社会学部は日本でもっとも多くの社会学者が集まっていますから、非常に間口が広く、社会学部に合っていない学生はあまりいないのでは、と思いますね。

「社会学とは何ですか」というご質問はよく受けますが、高校生向けの本をつくったことがあります。二〇〇九年に当時の社会学部教員で編纂した『高校生のための社会学―未

知る日常への冒険」(高校生のための社会学編集委員会編、ハーベスト社)です。副題に「未知なる日常への冒険」とあるように、社会学は日常生活の中にある、我々が気づいていないたくさんの方にアプローチしていくものです。社会学のテキストというより、副読本的な読み方ができます。

社会学というのは、社会が変わっていくのに合わせて、フレームも変わっていく。逆に言うと、社会学がテーマとするものは、社会が変化する限り新たに登場し得るわけです。我々がそれにどうアプローチするか、だと思えます。例えば大きな変化の一つであるグローバル化の進行も、いつ始まったのかについては異なる見方があります。二十世紀の社会科学のフレームは国民国家を想定していましたが、その国民国家を越えた地球規模的なもの、あるいは国と国を跨る地域で展開されるものなど、見方が変わってきました。こういった領域も社会学が扱う分野の一つです。もっとミクロに見れば、そこには個人や内面の世界、個人と他者の付き合い、さらにはそこを越える範囲での組織、コミュニティがあります。社会学はこれらのどの領域も扱います。

——社会学の魅力は何でしょうか。

やや独断的かもしれませんが、他の人と考えやアプローチの方法、興味関心が多少違っていても、それは別に不思議なことでも、おかしいことでもない、ということだと思います。それを認識できて、自分で確認していけるのが社会学の面白さの一つかな、と思います。自分の興味関心について、体系立てて考えていくためのアプローチの仕方を提供してくれるのが、社会学だと思います。

——社会学はどうやれば面白くなるでしょうか。

私自身は、社会学は面白いと思っていて、実証的には様々なドラマティックなストーリーがありますし、社会的背景との関わりなどによる理解、思想的なアプローチを考えても興味深いことはたくさんあるはずだと思います。

面白くないとすれば、社会学を教えている人たちがテキストをつくっている人たちが「どれだけ面白いことを伝えられるか」、「どれだけ社会学が魅力的かを伝えているか」が影響しているのでしょうか。そうであるならば、私自身もそうで

すが、社会学を専門にしている人たちが、大学生に向けてきちんとメッセージを伝える必要があるのかもしれない。

しかしながら、社会学の理論や調査法に関わる分野は、最初は面白くないと感じても、自分が実際に調査に携わったら、面白く感ぜられることもあるでしょう。ある程度やってみると面白いことが、そこまで到達しないで終わるケースも多いのではないのでしょうか。

——水上先生はどんな学生時代を過ごしたのですか。

高校時代からブラック・ミュージック（一九五〇から六〇年代のRhythm & Blues等）に傾倒して、音楽関係の本だけではなくマルコムXや吉田ルイ子などを讀んだりしているうちに、社会学への進学を考えました。

大学時代は東京・山谷での調査と、ロックバンドを演りました。卒業論文のテーマが山谷だったので、ドヤに泊ったり、日雇い労働に行ったり、冬の夜に野宿をしている人たちに、ボランティアでおにぎりや毛布を配るお手伝いをしたこともあります。アルバイトもいろいろ経験しまして、ニューヨークのハーレムにも行っています。

——その後、どのような経歴で立教大学に戻ってこられたのでしょうか。

大学卒業後は五年ほど会社に勤めましたが、脱サラをして、オーストラリア・ブリスベンにあるグリフィス大学の大学院に進学をし、文化人類学を専攻しました。一九九〇年十二月に修了し、一旦日本に帰国しました。実家の近くに東京都板橋区・大山商店街を歩いていたとき、三人のバン格拉デシユ出身者に“Where are you from?”と声をかけられました。日本で海外からの出稼ぎ労働者が注目された時代でした。私は、前日までオーストラリアにいたので、うつかり“Australia”と答えたら、“We will help you!”と外国人住民支援団体の事務所に連れていってくれました。それがAsian Peoples' Friendship Society（略称：APFS）で、それ以来この団体に関わっています。二〇一四年度からは大学院社会学研究科のプロジェクト型授業でも連携しており、近年はAPFSの活動記録をまとめた本の出版もお手伝いしました（吉成勝男・水上徹男編NPO法人APFS編集協力、二〇一八、『移民政策と多文化コミュニティへの道のり——APFSの外国人住民支援活動の軌跡』、現代人文社）。

帰国中に、学部時代の指導教授・奥田道大先生（二〇一四年三月ご逝去）のご助言を受けて、立教の社会学部助手として勤めました。その後は、メルボルンにあるモナシユ大学大学院に二度目の留学へ。留学中に兵庫教育大学の教員公募に応募、運よく就職できました。今思い出すと、博士論文を提出したまま空港に向かい、翌日から日本で授業でしたね（笑）。兵庫教育大学にいるとき、社会学部現代文化学科と独立大学院（当時）異文化コミュニケーション研究科が新設されるということでお誘いを受けて、それぞれの専任教員として赴任、今に至ります（現在は社会学部・社会学研究科に所属）。

——ご専門について教えてください。

国際的な人の移動とそれに関連した領域です。例えば国際的な移住者ですとか、エスニック・コミュニティの形成や変容、多文化主義などでしょうか。

一九九〇年代以降、国際移住に関する研究のフレームとしてトランスナショナルリズムが幅広く適用されていますが、トランスナショナルリズムのもとでは、移住した先で元々の出身国とのつながりを継続したまま社会参画をしている、という

ような捉え方になります。それ以前は、移民がホスト社会にいかに対応するか、定着するかというフレームで、特定の国家における移民の同化などが対象になったのですが、複数の国を対象とするフレームに変わってきています。多文化主義もそうですが、一九六〇年代ぐらまでは、移住した人びとが新たな社会でいかに文化変容を遂げるかという一面的な見方だったのが、ホスト社会も変化するという視点が加わっています。

しかしながら、最近は移民排斥の論調が強くなるなど、ある面では状況が変化しています。日本でも今年四月に入管法が改定（「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」が成立）されて、移民関係の話題が今までにないほど取り上げられるようになりました。

——学部長としての抱負をお聞かせください。

前学部長の松本康先生が、きっちりインフラを整備してこられましたので、次の展開に入るとするならば「今だからできること」を進めていけたらと思っています。「攻める段階」でしょうか。研究機関で「攻める」と言っても、教育と研究

の充実を意味するので、この二つをいかに一層充実させるか、ということでしょうか。学内外で立教大学社会学部のプレゼンスを強めていくことができれば良いですね。社会学部・社会学研究科同窓会や二〇一九年三月に発足した立教社会学会の運営も、その向上に関わるでしょう。

本年度社会学部は新しく「自考力入試」を導入して、インパクトがありました。本学全体の秋入試のカテゴリーでもっとも多い二百人以上の志願者が社会学部に集まっただけでなく、受験者の反応も手応えのあるものでした。二〇一六年度に導入した「国際社会コース」(二〇一六年度秋季入試「国際コース選抜入試」とともに、幅広く社会で活躍する人材育成につなげていければ、と思います。

——最後に、学生へのメッセージをお願いします。

高校までの勉強は基本的には受け身になるでしょう。興味がある本を読むことはありますが、その先へのつながりが難しいのではないのでしょうか。

大学、特に社会学部に入ると、自分の関心や問題意識である程度テーマ設定をして、さらに自分から学ぶことができる

ので、この点を大事にしてほしいです。

自分のテーマで一生懸命調べた経験は、その後も役に立つと思います。せっかく立教大学に入って、さらに社会学部に入って、多様な選択肢の中でゼミなどを中心とした少人数教育を受けることができるのですから、これを利用しない手はないと思います。

最後になりますが、積極的に参加することでいろいろなチャンスに出会い、充実した大学生活となりますよう、またその後の社会生活に生かされますよう願っています。

(取材・編集 日出 恵輔、大澤 崇仁)

社学生の 日常

お洒落で有名と言われる立教社学生。
そんな社学生たちのとある一日を
少し覗いてみましょう！

メディア社会学科 I・T (女) さんの日常



バッグはお気に入りの「agnès b.」。「量も結構入るんです！ お母さんに頼みこんで買ってもらいました（笑）」。バッグの中身は意外とシンプル。教材は曜日ごとにファイリングしているそう。これでごちゃごちゃにならずに済むんですね！ 私も見習わなきゃ……（笑）。

1日のスケジュール

10:00	起床
12:00	友だちとご飯
15:00	大学
17:00	授業終わり
18:00	アルバイト
23:00	就寝

「この日は午後からの授業だったので、大学の友だちと池袋でランチをしました。池袋は開拓のしがいがあります（笑）」。アルバイトは大学近くの飲食店、サークル活動はあまりしていないそう。こんな気ままな生活もありかも！

メディア社会学科 M・O（女）さんの日常



こちらは「Y-3」のリュック。たくさんの荷物を楽に運べるからリュックを愛用しているのだそう！ シューズやタオルなどが入っていて、アクティブなオーラが漂ってきますね！ 「荷物はお財布、ポーチ、勉強道具、水筒がベースです！」とのこと。

1日のスケジュール

07:00	起床
08:30	大学
17:00	授業終わり
18:00	サークル
21:00	友だちとご飯
24:00	就寝

この日は授業も多く、サークルの活動もあり、とてもハードスケジュールな1日でした。サークルは早稲田大学のインカレでソフトボールをしています。友だちの輪が広まって毎日充実できています！

社会科学 S・D（女）さんの日常



中国からの留学生である、S・Dさん。トートバッグには、友だちからの応援メッセージが書いてありました！ バッグの中身は意外とシンプル。留学生ということで、パスポートはいつも持参しているそうです。乾燥しやすいので、リップクリームは三本持ちがマストだそうです。

1日のスケジュール

11:30 起床

12:00 昼食づくり

15:00 大学

19:00 帰宅

23:00 就寝

大学近くの寮に住んでいるS・Dさん。寮では他の留学生も生活しており、友だちがたくさんできたそう！「友だちと部屋に集まって毎日にぎやかに過ごしています！」

社会学科 N・T (男) さんの日常



荷物を取り出しやすいトートバッグを愛用。モバイルバッテリーはスマホと同じくらいマストアイテム！ 忘れたら結構きついかも（笑）。荷物は必要最小限で持ち歩くタイプ。ミニマリストはスマートに見える！？

1日のスケジュール

06:30	起床
08:50	大学
17:00	帰宅
18:00	友だちとご飯
24:00	就寝

大学生でも朝が早い日があるんです！ 立教大学の1限は8時50分から……。 「1限は遅刻しないようにいつも緊張感を持っています（笑）」。筆者も1限のときは準備に必死です！ 早起き頑張ろう（泣）。

現代文化学科 S・T（男）さんの日常



荷物を入りやすいアウトドアブランドのリュック。「折り畳み傘は持っているとう便利です！ パソコンも守れます（笑）」。立教大学は駅から10分ほど歩くので、傘はマストアイテム。持ち歩いている人はけっこう多いです。備えあれば憂いなし！！

1日のスケジュール

08:00	起床
10:45	大学
15:00	帰宅
17:00	ライブ
24:00	就寝

「この日は好きなバンドのライブがありました！ サークルも音楽系に入っています！」大学生は時間を比較的自由に使えるチャンス！ みなさんも大学ライフを楽しもう。

(取材・編集 岩坂 ののは)



日本各地の 社学生

大学という場所は、日本各地から様々な学生が集まる場所……。
ということで、地元を飛び出して立教大学への進学を決めた地
方出身者に、東京に対するイメージなど、話を聞いてみました！

社会学科一年 西岡凜さん

広島県出身



—— 上京する以前は東京に対して、どの
ような印象を持っていましたか？

ただ人が多く、都会だなあとという印象
がありました。旅行でしか行ったことが
なかったです。観光地というイメージが
強かったです。

—— 実際に東京で過ごし始めて、印象は
どうでしたか？

人が多く、都会であるという印象は変
わりませんでした。大学生という自分

の立場から見ると、学ぶにせよ、遊ぶに
せよ、様々な環境が整った場所であると
再認識しました。

—— なぜ東京の大学への進学を決めたの
ですか？

一八年間、広島以外に住んだ経験がな
く、漠然と東京に行きたいという気持ち
を持っていたからです。

—— 地元の良いところや特徴、ほかの都
道府県と違うところを教えてください。

都会でもあり、田舎でもあり、海もあ
り、山もあり、観光地もあり、とても住
みやすい場所です。また、広島の人たち
はとても地元愛が強いです。広島
出身の同級生や先輩に会うと、地元のこと
やカーブの戦績のことなど、広島ト
クを広島弁でよく話します。

——地方から立教大学への進学を考える学生に一言お願いします。

かなり多くの学生が首都圏出身ですが、入学してみると、皆すぐに仲良くなれます。むしろ、地元のことを方言まじりで話すと、とても興味を持って話を聞いてくれます。

社会学科一年 中村ひかりさん

新潟県出身



——上京する以前は東京に対してどのような印象を持っていましたか？

冷たい人ばかりいると思っていました。

た。人がとても多いので、どこに行っても待ち時間が長いというイメージがありました。

——実際に東京で過ごし始めて、印象はどうでしたか？

確かに冷たい人もたまにいますが、ほとんどの人が優しく、様々な人がいると思いました。相変わらずとても人が多いと感じますが、すぐに慣れました。

——なぜ東京の大学への進学を決めたのですか？

このまま新潟にいても、何も変わらないと思ったからです。

——地元の良いところや特徴、ほかの都道府県と違うところを教えてください。

新潟はお米が美味しいです。あと田んぼが多いので緑豊かで、心が落ち着きま

す。雪がたくさん降るので、学校の体育の授業でスキーやそりなどができて楽しいです。公園やダムがたくさんあるので、紅葉狩りやお花見にも最適です。片貝花火や長岡花火などの花火大会が多くあるのも魅力の一つです。

——地方から立教大学への進学を考える学生に一言お願いします。

上京するときは、ほとんど知り合いもない状況だったので、とても心細かったです。ですが、いまは友達もたくさんできて毎日が楽しく、立教大学に入ってからとてもよかったです。

新潟では絶対に出会わなかったような人に会うことができ、様々な経験ができて自分の世界が広がります。皆さんもぜひためらわずに上京してみてください。

愛媛県出身



—— 上京する以前は東京に対してどのような印象を持っていましたか？

とにかく人が多く、日本の文化や経済の中心地であり、何でもある場所というイメージがありました。

—— 実際に東京で過ごし始めて、印象はどうでしたか？

駅やビルなどの、あるもの一つ一つがとても大きく、東京は迷路みたいな場所だと感じました。

—— なぜ東京の大学への進学を決めたのですか？

メディアについて学びたかったので、情報が多く集まる東京がいいと感じたからです。単純に東京に憧れがあり、一度は住んでみたいと思っていたことも決めた手になりました。

—— 地元の良いところや特徴、ほかの都道府県と違うところを教えてください。

ほかの地域に比べて気候が穏やかで、住みやすいのが良いところです。野菜や果物の値段がとても安く、特に柑橘系の種類が豊富で美味しいです。

—— 地方から立教大学への進学を考える学生に一言お願いします。

立教大学は、キャンパスが綺麗で、施設が充実しています。その上、池袋という好立地にあるため、必要なものはすぐ

に見つけられると思います。その反面、物が溢れているので、主体的に探さなければ何も見つけられないと思います。あなたの手で充実した学生生活をつくり上げてください。

熊本県出身



——上京する以前は東京に対してどのような印象を持っていましたか？

日本の中心、多様で主要な企業、観光産業、大学などが集結している。また、人口密度が高く、様々な人が密集しており、地方に比べると自然が少なく、空気が汚い。人の温かさのようなものが感じられないというような印象を持っていました。

——実際に東京で過ごし始めて、印象はどうでしたか？

想像とほとんど変わりませんでした。ですが、この環境に意外にもすんなり早く溶け込めたことに驚きました。慣れてしまえば、地方に住んでいたころに抱いていた東京への憧れは小さくなったように感じました。

——なぜ東京の大学への進学を決めたのですか？

このまま熊本の大学へ行き、仕事に就くという自分の将来を思い描いたときに、あまりにも狭すぎる世界だと思ったからです。また、大都市・東京に暮らす女になりたいという単純な思いもありました。

——地元の良いところや特徴、ほかの都道府県と違うところを教えてください。

熊本は、山も海も川もあり、自然がとても多くあります。また、中心地は案内栄えているので、そのバランスが暮らす上で、ちょうどよく感じられます。住みやすい場所であり、一度定住すると離れがたくなってしまいます。

——地方から立教大学への進学を考える学生に一言お願いします。

立教大学は、東京都の中心にキャンパスを構えているにもかかわらず、緑が溢れ、のんびりとしたリラククスできる場所、とても魅力的です。自由な校風とおしゃれなキャンパスの中で素晴らしい大学生活を送ることができます。

(取材・編集 藤井望愛)

殺人犯が凶悪な姿をしているとは限らない

—映画『テッド・バンデイ』学内試写会&特別授業潜入ルポ



二〇一九年十二月五日。池袋キャンパス八号館三階に、多くの学生が列をつくっていた。特別公開授業として、映画『テッド・バンデイ』の試写会および監督・学生によるクロストークがメディア社会学科主催で行われることになっていたからだ。

十二月二十日より全国公開予定のこの映画では、アメリカの俳優、ザック・エフロンが三十人以上の女性を惨殺した実在の殺人鬼、テッド・バンデイを演じているほか、リリー・コリンズやジョン・マルコヴィッチら豪華俳優陣が脇を固めている。

会場内のざわめきが止まぬなか、十五時二十分、定刻通り上映が始まった。そして、一〇九分に及ぶ本編の終了後、訪れたのは長い沈黙であった。各々、自分が目撃した事実を何とか消化しようとしていたのかもしれない。上映前のにぎわいが嘘のように、学生で埋め尽くされた教室はシヨックで静まりかえっていた。

目玉であるジョー・バーリンジャー監督と学生たちの対話は十七時半開始を予定していたが、監督を乗せた車が渋谷・池袋間の渋滞に巻き込まれたとの報せがあった。十八時二十分ごろ、ようやくバーリンジャー監督が到着。場内が興奮に包まれるなか、司会のメディア社会学科・生井英考先生、学生インタビュアーのメディア社会学科四年の中村涼乃さん、メディア社会学科三年の眞知田尚樹さん、社会学研究科博士課程前期課程一年の小島春恵さんがステージに登壇した。以下にそのクロストークの一部始終を記す。

——最後にテッドが忠告していた「凶悪犯は凶悪な姿で待ち構えているのではなく、私の隣にいる人がある日突然変わってしまうという恐ろしさがある」というメッセージがとても興味深かったです。

まさにそこが一番伝えたかったところ
です。私たちは、こういう人物が「自分たちから遠く離れたところにいる」、「私たちとは全く異なった、別の次元の人物だ」と思ったがるのです。「自分たちと違うから、その怖さをすぐに見極めることができ、避けることができる」と思い込んで安心したいからですね。しかし、テッド・バンデイの存在はそういうものとは違います。悪をなす人物は親友や兄弟など、まさに近くにいるかもしれない。これは厳しい現実なのですが、それこそがリアリティなのだと思います。人は誰もが善と悪の両面を持っていて、それぞれを働かせることが可能なのだと思います。

——この映画は日本を除けばNetflixでのみの配信とお聞きしました。大きなスクリーンで上映されないということ、ふだんの制作と異なっていた点があれば教えていただきたいです。

スクリーンのサイズの違いは、正直制作の段階では考えません。観客に対してどれくらいインパクトを与えられるかというところをメインで考えます。それがテレビをみている三人でも、スマホをみている一人でも、映画をみている三百人でも同じなわけです。もともと本作は劇場公開用に制作されていますね。サンダーズ映画祭での最初のプレミアの後でNetflixが世界ほとんどの国での放映権を買ったので、それらの国では劇場公開されないのですけれども、映画の制作費を集めるためにいくつかの地域では映画館でも見られるようになっていきます。

——制作環境や予算面で良かったと思う



点は何ですか。

自分が映画を製作し始めた二五年前には、ストーリーミングサービスがありませんでした。ドキュメンタリー作品ができあがっても、売り込める場所は一、二カ

所しかありません。多くの人にみせることができなかったわけです。それが、

Netflixなどのストーリーミング革命が起きて、作品を届けられる人の数がものすごく増えました。例えば、今観ていただいた本作は、Netflixにおいて二八日間で七〇〇万人が視聴したと言われていきます。フィルムメーカーとしては、これは大変な魅力です。私たちは、自分の作品をみせたいわけですから。ただ、そのために諦めなければいけないものもあって、それが「一つの劇場にコミットして映画を楽しむ」という体験です。もともと私が作家になったのはその体験が原点でした。今はSNSがあったり、Netflixのように、ターゲットに向けて発信できたり、「映画をみる・みせる」という行為において、今までとは違ったコミュニケーションづくりがされているのではないかと思います。

——被害者の名前がエンドロールに表示

されていましたが、彼らの思いはどのように入れ込んだのでしょうか。

「『実際の人物が被害者だったんだ』という風に観客に見てもらいたい」という思いから、エンドロールに名前を表示しています。この作品は、被害者自身を描いた物語だと僕は思っています。作品をみる我々にとつては、たくさんある娯楽作品の一つにすぎないかもしれない。でも、ご本人にとつては悲劇です。こういった物語をつくるというのは「他人の悲劇をみなさんにみてもらうこと」だと思っています。だからこそ、僕はこの作品をつくるとき、大変な責任を感じながらつくりましたし、例えば今回の映画が暴力表現をたくさん必要としているものであったとするならば、そもそも製作しようと思いませんでした。みていただいた通り、あえて暴力シーンを入れていません。被害者にそういったものをみせるのは非礼にあたると思っているから

です。

——この映画において、社会的なメッセージを伝えるにあたって表現上で工夫したことは何ですか。

若い世代の方に「悪の本質」あるいは「捕食者・加害者」というものがどのよう存在しているかということを伝えたいという思いがありました。主演をお願いするときに最初に思い浮かんだのがザック・エフロンだったわけですが、彼は私の娘の世代には本当に人気がある俳優さんです。テッド・バンデイ本人のことを知らないのに、ザックのイメージで「この主人公は間違ったことをするはずがない」と思って映画をみる若い人がたくさんいるだろうと思います。ザックの持つそんなポジティブなイメージを持ち込んで、「殺人者は凶悪な姿ではない」というメッセージを誇張してつくったつもりです。伝えたいメッセージはベ-

シックなものかもしれないけれど、重要だし、社会的なメッセージとして伝える理由にもなっていますね。

(取材・編集 杉山 奈緒子、大澤 崇仁)



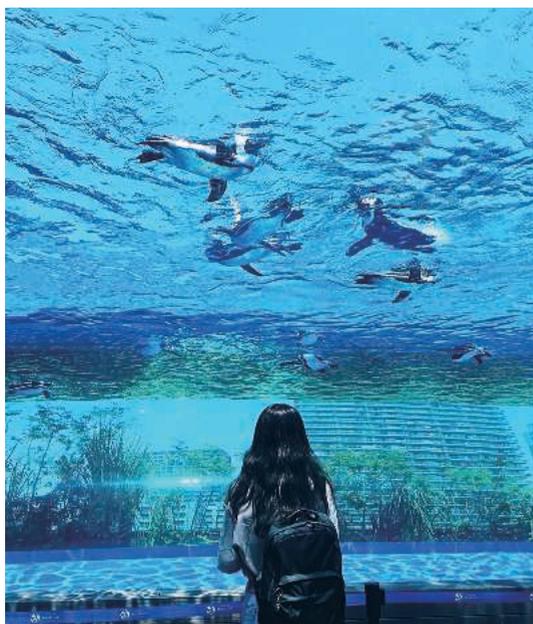
左からバーリンジャー監督、小島春恵さん(社会学研究科博士課程前期課程1年)、中村涼乃さん(メディア社会学科4年)、眞知田尚樹さん(同3年)

留学生コラム

地味にすごかった立教大学 での三つの経験

ソンミヌさん

社会学部メディア社会学科に交換留学
聖公会大学日本語日本・新聞放送学科（韓国）ご出身



二〇一九年春、私の春学期交換留学が始まった。日本以外の多様な国の人に出会ったのも、初めてだった。まだ下手な日本語と、それよりもっと下手な英語、ときにはポデイングーじまで使って会話をするのが大変だったが、本当に楽しかった。

立教大学では交換留学生のためのプログラムが多かったため、寮が違っていても多くの外国人の友だちと付き合うことができ嬉しかった。

立教大学での春学期は私にとって、「青春」だった。あまりにも地味だった韓国での大学生活と違い、立教大学で生き生きとした青春を感じた。ドラマや映画、小説の中で見ていたような、サークル活動に熱中する学生たちの姿が、特に記憶に残った。

私が立教大学を選んだ理由は、「メディア社会学科」があるからだ。日本語で新聞放送学を勉強してみたかったからだ。特に砂川浩慶先生の「専門演習」が一番記憶に残った。ディベートをしたり、発表したりするときには、言葉の壁から無力に感じて恥ずかしかったけど、結局は本当に勉強になった。砂川ゼミで出会った先生と友だちのおかげで、韓国ではできなかった特別な経験、そしていろんなメディアについて勉強ができて、立教大学に留学に来てよかったと思った。

私の留学生活

ユリ フィトリヤニ シュマン トリ さん

経営学研究科 国際経営学専攻に交換留学
バジャジャラン大学（インドネシア）ご出身



こんにちは、インドネシアから来た大学院生のユリです。私は、二〇一九年度春学期の交換留学生でした。日本で勉強することは、学部生の頃からの大きな夢でした。私にとって日本は、伝統文化と技術革新が入り混じった、世界で最も魅力的な地域です。立教大学の講座リストを読んだとき、私の研究テーマと情熱にぴったりの包括的なカリキュラムがあると分かりました。

立教大学の池袋キャンパスは、勉強をするにはとても居心地が良い場所です。学生が利用可能な最新の書籍やPC、プリンターやコピー機を備えた快適な図書館があります。図書館は月曜日から日曜日まで毎日開館しています。課題に取り組んだり勉強したりするのにとても役立ちました。

立教大学の指導方針は、私にとってかなりユニークなものでした。なぜなら、教授は学生に授業内でも外でも議論させることを促すからです。いくつかのグループワークは、学生たちの間にチームワーク能力を生み出しました。私は、他の留学生と一緒に日本語クラス（サバイバルジャパニーズ）を履修していましたが、そのクラスのおかげで、いまではひらがな、カタカナが読めるようになり、基本的な会話も理解できるようになりました。

また、立教大学での留学生活の中で一番印象深い思い出は、日本語スピーチコンテストに参加したことです。大勢の日本

人や他の留学生の前で日本語のスピーチは、最も素晴らしい経験となりました。このイベントに参加したことによって、私は日本人学生サポーターとも知り合うことができ、私たちはとても仲良くなりました。立教大学での勉強は、まさしく夢を叶えたようなものでした。

取材を終えて

今回、このコラム企画を提案したのには二つの理由がある。

一つは、留学生の存在をより多くの人に知ってもらえるきっかけになれば、と思ったからだ。彼らの視点から見ると立教は新鮮で本当に面白い。「外国人の友だちが欲しいけれど、英語は喋れないし……」などと思っている人はもったいないと思う。留学生の中には、かなり日本語レベルが高い人もいる。言語の壁をあまり重く考えず、面白い人に会いたいなと思ったら、気軽に国際センターのイベントなどをチェックしてみてほしい。

そして、二つ目は、正直言うとこちらのほうが大きいのだが、いま留学をするか悩んでいる学生の後押しが少しでもできれば、と思ったからだ。留学はその後の生き方を大きく変えることがある。これは、昨年一年間のカナダ留学を経て、

現在私が感じていることだ。もちろん、留學生生活が納得のいくものになるかどうかは、実際に始まってみないと分からない。けれど、色々なことを考えて悩んで、それでもやっぱり行きたいと思つて決めた留学であるならば、後悔するようなことは絶対ないと思う。

もし、相談したいことや悩みなどあれば、気軽に連絡をください。私自身は立教の制度を使っていないので、どれほどお役に立っているかは分かりませんが、不安な気持ちも誰かに話せば軽くなるかもしれません。

最後に、ここまで読んでくださった皆さん、本当に嬉しいです。ありがとうございます。

(取材・編集 杉山 奈緒子 16de083@rikyo.ac.jp)

社学生課外活動シリーズ①

長本海渡さん

単位のためにシドニーに留学してみた！



「海外に興味がある」「留学をしてみたい」という社学生は多くいるだろう。しかし、様々なプログラムが学内外に無数にあり、「正直どれを選べば良いのか……」と迷っている者もまた、少なからずいるだろう。

今回紹介する長本海渡さんは、立教の社会学部から送られてきた留学プログラム「グローバル・スタディー・プログラム（シドニー）」の案内メールにあった「六単位」の言葉がたまたま目に留まったことで、人生が変わった方だ。

現在四年生の長本さんは、もともと海外での活動に興味があったのだが、それ

に拍車をかけたのは二〇一九年二月。三年生の終わりにロサンゼルスでの一週間のプログラムに参加したことだった。「五歳の頃に海外に行つてから縁がなかった」という長本さん。「海外つてもっと遠いだろうと思つてたんですけど、『案外近いな(笑)』つて思いました」という。

四年生になり、次に海外に行くなら何をしてみようかと考えていたとき、たまたま先述のメールが届いた。それは、「一カ月のシドニーへの留学で六単位が出る」というプロジェクトのお知らせだった。当時の長本さんの残単位数は「崖の先端に手だけがみついている状態」。海外には行けるし単位も取れるなんて、「嬉しいことしかない」と、このプログラムを選んだという。ただ、最初の書類審査ではその残単位が原因で書類審査に通らず、「一旦保留」というかたちになったそう。この後の面談でなんとか通ったことだが、ヒヤツとした瞬間だった。

留学先のシドニーではインド出身の家

庭にホームステイし、現地の英語のクラスにはブラジルや中国から来た留学生もいたという。そういった「背景が全く異なる人たち」とのコミュニケーションが一番苦労した。「もちろん言語の壁というのもあるんですけど、根本の考え方もみたいなものが全く違ったので、そのコミュニケーションが一番難しかったです」と語る。

あとはとにかくシドニーを満喫しようと、学びの時間以外ではたくさんアクティビティを体験した。思い出に残っているのは、シドニーのランドマークとして有名なハーバーブリッジに登ったことだ。料金は三万円ほどだったが、眺望は抜群。また、カンガルーの肉にもチャレンジしたそう。「牛肉に近い味がするけれど、臭みがあって美味しくはなかった」と苦い表情を浮かべた。

「卒業後は海外に行けたらいいなと思います」という長本さん。その気持ちにさせてくれたのは二月のロサンゼルスと

この留学プログラムだった。「文化背景が全く異なる人と関わると、逆に自分のことについても知れると思っています。もつといるんな人と関わってみたいですね」と意欲を見せる。

最後に、「あのととき、六単位で釣って、くれなかったら行つてなかったかもしれないですね」と長本さんは笑った。人生を切り拓くチャンスはどこに落ちているかわからないものだ。



ハーバーブリッジにて

社学生課外活動シリーズ②

千坂 怜 さん

ひと夏で、二つの海外体験を掛け持ち！



たとえば、アルバイトならば二〜三つ掛け持ちをしている者は多いだろう。サークルだって、兼サーが当たり前だ。

では、ひと夏で留学や海外インターンや二個「掛け持ち」した者はどれぐらいいるだろうか？ 今回紹介する三年生の千坂怜さんは二〇一九年の夏、そんな経験をした。

千坂さんは、二年生の夏にモンゴルを一人で巡るなど、元々行動力のある方。このひとり旅についても聞いてみたいのだが、それは別の機会に譲るとしよう。

まず千坂さんは、中国政府が出資する「HSK奨学金短期留学」に、一〇日間

の日程で参加した。一年次の第二外国語はドイツ語だった千坂さんだが、「いまは中国が好きで、一年休学して向こうの大学で学ぼうかなって考えています」というほど、中国に興味を持っている。独学で勉強をし、中国語検定取得を目標に掲げている。

この短期留学は、上海や南京での観光もプログラムに入っていて、様々なことを経験したという。また、他大学の学生はもちろん、高校生とも一緒に行動したそう。年齢・出身・中国語のレベルなど、何もかも違うメンバーと過ごす経験はとてもよい良い刺激になった。

中国から帰った八月。千坂さんはすぐに次のプログラムでラオスに飛んだ。こちらは立教大学経営学部主催のインターンシッププログラムで、約一カ月間のものである。

千坂さんのインターンシップ先は「日本とラオスをもっと身近に」をスローガンに、日本の商品をラオスで売ったり、

ラオスに興味を持っている日本人にスタ
ディーツアーなどの紹介をしている会社
だった。ビエンチャンやバクセーといっ
たラオスでも有数の大都市でビジネスを
展開している。

「卒業後は国際協力の分野で働きたい
と思っているので、関心からは少し外れ
るのだけれど、ビジネスの視点も大事だ
し、海外で働くビジョンがもてるようにな
るかなと思ってインターンに参加しま
した」と千坂さんは言う。現地企業での
活動がメインではあったものの、イン
ターンした会社の取引先の中にはJIC
Aや大使館、NPO、NGO等が多かつ
たため、千坂さんの本来の興味関心に近
い分野について見聞きしたり体験したり
は十分にできたそう。

特に印象に残っているのは、隣国カン
ボジアの「日本地雷処理を支援する会(J
MAS)」を訪れたとき、前日に発見さ
れた九二ミリ迫撃砲の不発弾を爆破処理
するところを目撃したことだという。「あ

れは日本にいたらほとんど見られないも
のだし、『世界の現実を見た!』という
印象を強く受けました」と熱く語って
くれた。

二つの海外での活動を終えて、一番学
んだことは何かと聞くと、「自分の行動
と目的が一貫しているというシンプル
さ」であると語る。ただ海外体験に参加
するのではなく、目的意識を持って参加
することで、自分の課題を解りやすく、
かつ鮮明に捉えられるのだろう。



ラオスのJICA代表との一枚

社学生課外活動シリーズ③

幕田海都さん

自主製作映画でヒーローの中に入った男



『ウルトラマン』や『仮面ライダー』などに代表される、着ぐるみや模型、映像合成等を使って、現実には困難な映像をつくり出す作品ジャンルを「特撮」という。特撮にはヒーローがつきものである、誰もが一度は憧れる存在だろう。「立教大学特撮愛好会」に所属する幕田海都さんは、その夢を叶えた。

幕田さんは現在一年生。このサークルに入った理由を聞いてみると、「『好きなこと』と『やりたいこと』が同時にできる場所だったからですかね」と答えてくれた。

「好きなこと」というのはもちろん特

撮。はじめに興味を持ったのは、幼い頃に見た『仮面ライダー』だった。一度は「卒業」したものの、中学のときに、テレビのバラエティ番組で特集されたのをきっかけに、ストーリーの深さや奥行きに気づき「カムバック」してきた。

一方、「やりたいこと」は演技だった。高校まで特に経験はなかったが、新しいことにチャレンジしてみたかったという。

そんな思いでたまたま新歓期間に見つけたのが、「立教大学特撮愛好会」のブラスだった。活動内容を尋ねると、特撮の鑑賞のほか自主制作映画をつくっていると説明があり、入会を決めた。

「早速一回目の方向性会議の場で『ヒーローやってみたい』って言いました(笑)」という幕田さん。早くも、この秋の自主製作映画の撮影でジャージとダンボールでできたヒーロースーツに入るチャンスがめぐってきた。感想を聞いてみると、「実際のスーツアクターの人

の気持ちを感じてきた感じですね。でも本物はもっと動きにくいと思うので、プロの人はすごいなと思いました」と語った。

また、素のまま顔を出して演技するシーンとの演じ分けについては、「素人ですけど（笑）」と前置きしつつ、「着ぐるみを着ているときは、大きい動きじゃないと伝わりにくいので注意しています。逆に素面の演技のときは、細かい所にも意識を配る感じですよ」とその違いを語ってくれた。

撮影現場を取材した際、特に印象的だったのが幕田さんの声量だった。周りに一般の学生たちがいるなかで、高らかに「変身！」と叫ぶのだ。「恥ずかしがって中途半端に終わると一番カッコ悪いですから」と幕田さんは言う。「だって本物の仮面ライダーも人が見ているなかで変身しますから（笑）」と冗談を言って照れ隠しをしていたが、活動に全力向き合う幕田さんの人柄を見た。

SPF実行委員会とも兼サーをしていて多忙な幕田さん。来年以降の「立教大学特撮愛好会」での活動について聞いたところ、「自主制作映画の脚本とかもやってみたいですね」と新たな境地への野望を見せてくれた。

「小さいサークル・低予算でも、見せ方次第でちゃんとしたものがつくれるってことを、先輩方の作品に参加して教えてもらったんで、今度は自分で考えて面白いものをつくってみたいです」と今後の展望を語った。

（取材・編集 大澤 崇仁）



撮影中のオフショット。ヒーローの名前は「ダンボリオン」

必修授業紹介

新一年生の皆さん、

ご入学おめでとうございます。

新しく始まる大学生としての生活に胸を躍らせていることでしょう。しかしその一方で、授業への不安を抱えている人も多いのではないのでしょうか？

そんなあなたに送る社会学部の必修授業紹介！ これを読んでも膨らめばいいなあと思います。

これからの大学生活が、とびきり素敵なものになりますように！

社会学原論 1・2 社会学部必修授業

社会学とはどのような学問なのでしょう。ここでは偉大な社会学者たちが取り組んできたテーマを扱い、この学問に独自の「思考法」を学びます。たとえば、「人はなぜ自殺するのか」。あなたはどのように考えますか？ 新しい考えが浮かんだら、あなたは未来の社会学者かもしれません！ 一見身近な事柄も、社会学を通すと様々なことが見えてきます。細胞をフル活用して理解を深めましょう。

社会調査法 1・2 社会学部必修授業

街頭のアンケート、内閣支持率、学校のいじめ調査など、私たちは日ごろから社会調査に触れています。でもアンケート用紙から何がわかるの？ 何を根拠に社会の傾向を決めるの？ とモヤモヤしたことはありませんか。ここでは、社会調査の理論から実践までを学びます。新聞や広告にでてくる「調査結果」に安易に踊らされることなく、有利に生き抜くことができるかも。

メディア社会学

メディア社会学必修授業

新聞・ラジオ（マスコミ）の登場、つまり、情報を広範囲に伝達する技術は人類の意識に何をもたらしたのでしょうか。この授業では、メディア（伝達を「媒介」するもの）の発展の歴史と、それがどのように人びとに影響を及ぼしてきたかを学びます。高校の世界史で勉強したことも出てきますが、最終的には現在について考える視座を得られるようになっていて、面白いと思います。

ほぼ全員必修！言語科目紹介

- ・スペイン語…動詞の活用が多すぎて辛い。授業は和やか。
- ・中国語…発音は大変だったけど、分かると楽しい！
- ・朝鮮語…歌を歌ったり、楽しみながら学習できる。
- ・ドイツ語…冠詞が難しいです。話者が多いイメージ。
- ・フランス語…クラスの雰囲気良かった！発音は難しい。

文化の社会学理論

現代文化学科必修授業

皆さんは、違う島に住む何人かの決まったパートナーと、貝の腕輪やネックレスを交換する、という文化のある島のことを知っていますか？ おそらく多くの人は「想像もつかない」と答えるでしょう。この授業は「社会」の中に無数に存在する「文化」に焦点を当てて進行していきます。自分にとって想像もつかない文化に触れ、考えを巡らせる。大学生になり、様々な人と関わる私たちに、視野を広げる機会を与えてくれる授業です。

（取材・編集 山本 彩水）

退任教員対談①

是永論先生×池上賢先生

安易に語られる「真実」に敏感に

——最初で最後の師弟対談



——池上先生がご就職なさるということで、今回は「師弟」対談です。指導教員だった是永先生から見て、院生時代の池上先生はどんな印象でしたか。

是永 研究休暇でイギリスにいたとき、池上さんからメールで「指導教員になっていただけませんか」って相談を受けたんです。私もあの頃は、まだまだ修士の学生さんとはとっていなかったし、最初は迷ったんですよ。考え過ぎて長いメールを送って、池上さんが非常に困惑していた様子だったので覚えています。

池上 是永先生から「やぶさかではない」っていうメールが来て。「やぶさかではない」の意味がよくわかんなくて、すごく悩んだ記憶があります（笑）。

是永 漫画を「量的にやりたい」ということだったんですけど、私は漫画という非常に個人的なメディアを量的に把握することに違和感があつて、「まずどういう社会学の研究としてまとめるか」を考えなきゃいけないと思っただけです。それで、「ライフストーリーが面白いんじゃないかな」と勧めて。方（法論では、桜井厚先生（二〇一三年に本学をご退任。現在、日本ライフストーリー研究所所長）にお世話になりました。

池上 是永先生は理論や概念のことを丁寧の説明してくれま

した。漫画でたとえると、是永先生は「トレーナー」タイプなんですよ。ミットを持って待ち構えて、「もつと腰を入れろ！」とか「こういう風にパンチを打て！」みたいな感じ。そしてある日突然、「山にいる仙人に会ってこい」と言われて（笑）。で、桜井先生のところへ行ってみると「この岩を砕いてみろ」と、なにも教えてくれない（笑）。桜井先生は「達人」感があるじゃないですか。実際には、桜井先生に何を言われたかというのと、「とにかくデータを持って来なさい」と。データに寄り添って、そこから何が読み取れるのかということ教わりました。うまくいかないときは、是永先生に教わった理論に戻る。師匠には本当に恵まれました。でも、お二人にとっては扱いにくい弟子だったと思います（笑）。
是永 池上さんの長所は「データを集める」というところにあつたと思うんですね。これは学生さんにお伝えしたいことなんですけど、みなさんこの検索万能時代に「地道に集める」という行為を億劫がっている節がある。でも、やっぱり「コツコツと集めていく」ことに勝ることはないんです。池上先生はすごくその能力が長けていると思ったので、あとは集めたもので考えて行けばいいだろうなと思っていまし

た。

池上 確かに、そこは頑張った記憶がありますね。検索してPDFがなければ、国会図書館や立教図書館でコピーしたりしていました。あと、『思想の科学』という雑誌の特集を片っ端から読んでコピーしたり。漫画研究者にも「先行研究をよく調べている」というふうの評価されることもあります。

是永 インタビュー対象者もうまく見つけていましたよね。ラーメン屋さんへのインタビューとか、すごいなと思いました。職人氣質の方を相手に物怖じせずに。

池上 今考えると、なんて恐ろしい調査をやったんだと思いますよ（笑）。ある人にライフストーリーを聞くのって、たとえテーマが「見「軽く」見えたとしてもすごく「重い」となれますよ。その人の魂的な何かを聞くわけですから。漫画の話だから深刻な話はないだろうと思っても、たとえば「おじいちゃんからもらったウルトラマンの図鑑をお母さんに破られて、今でもトラウマになってフラッシュバックする」とかっていう話がボンボン出てくる。今だと遠慮しちゃって聞けないかもしれない。「若かったからこそ」かもです。

——ここからは、是永先生にいただいた「大学の中にいる人たちは、社会性がないのか？」というテーマで語り合っていたいただきます。

是永 それに関する話題を池上さんがリツイートしていて、気になったので提案しました。

池上 大学って「象牙の塔」とか言われて、「世間知らずの社会性のない人がいっぱいいる」と言われるんですよ。確かに、僕は名刺の渡し方も営業の仕方也不知道いけれど、それを根拠に「社会を知らない！」って言われると「でも学者の社会は知ってるしな」って思ったりはしますね。同じように、いわゆる肉体労働者の方とか職人の方の世界にも、全然違うルールや規範があって、これ全部「社会」なんですよ。

あとは、有名な企業の社長さんとか、若手の学者みたいな人たちが、わりと平気な顔して、弱肉強食な価値観を全面に押し出して「今の社会はこうだ」とか「これが社会の真実だ」って言っているのを見ると、すごく違和感を覚えますね。

是永 私もやっぱり、「社会を全体として見なすことの危険」をもっと考えて欲しいです。それに関して、池上さんの研究っぽく(笑)漫画語りをするとですね、手塚治虫さんの『ブラッ

ク・ジャック』という漫画で、主人公の医師が手術している病院をテロリストが占拠して、犠牲者を出してしまうという話があったんですね。停電の中で手術を成功させた主人公が、物語の最後で逮捕されたテロリストに「私は一人を助けるだけで精一杯だ」っていうんですよ。テロリストは「犠牲者を出したとしても社会を変えられる」って思うわけけれども、結局一人ひとりを救うことしかできないんだと。私はそこにすごく示唆深いものがあるなと感じます。どんなお医者さんでも一度に一人しか治せない。当たり前だけれど、それを忘れると、すごく極端な考えになってしまうよね。「社会全体を変えればなんとかなるだろう」「細かいところはどうでもいい」っていう発想になってしまう。

池上 私も授業などで「物事の文脈を考えることの重要性」をみんな忘れてるよね」とはよく言います。たとえば、生活保護の不正受給の話とかが出ると、背景を考えずに、結果だけ見てバッシングする人がすごく多いですよ。「不正なのだからもっと厳しくするべき」とか。そういう発言って、わかりやすい物語で一刀両断できて気持ちいいのだけれど、慎んで欲しいなと思います。

是永 社会学はそれに対して、センシティブに「状況を見る」

ことを考えてきた学問なんですよ。社会学部にいるみなさんはそのあたり、なおさら考えなきゃいけないし、要求される部分だなどと思います。

——最後に池上先生から、今後の抱負をお聞きたいです。

池上 それこそ、是永先生からお褒めいただいた「データ収集」を最近あまりやれていないんですよ。博論を本にすることで手いっぱい、新しい材料をここ五年ほど集めてなくて。

是永 資料研究は熟練がいる分野だと思いますね。歴史学者の研究の方法なんか見ても「資料に対してクリティカルである」っていうことをどういうセンスでやるのかとか、「面白ところ」です。

池上 最後に漫画的なたとえで言うと、「師匠は越えなきゃな」と……。単著も出して、一人前の研究者だという自負はあるのですが、コメントをもらうと「やっぱりダメだ」と（笑）。将棋では弟子が師匠を倒すことを「恩返し」っていうそうなんですけど、そういう恩返しは無理っぽいかな（笑）。

是永 いやいや私はトレーナーですから（笑）
池上 格が違うというか。けど、何かしらの形で「恩返し」

したいなと思います。
是永 これからのご活躍を楽しみにしております。

（取材・編集 大澤 崇仁）



退任教員対談②

田麿裕祐先生 × 前田泰樹先生

質的研究と量的研究が わかり合うために



——今回、田麿先生が前田先生を対談相手にご指名されたのはどういった経緯だったんですか。

田麿 私は計量的な手法で労働の研究をしているんですが、学会で以前、エスノメソドロジー（質的研究方法の一つ）の方々と同じ部会になったんです。学会報告ではたいてい、最後に部会全体で議論をする時間があるのですが、そのときにエスノメソドロジーの人たちと会話ができないんですよ（笑）。計量研究同士、エスノメソドロジー同士では活発にやりとりできるのに。司会の方も困ってらっしゃるのがよくわかる（笑）。部会のテーマは「労働」で同じなんですけど、どこから会話の糸口を見つけたらいいのか全くわからなくて……。

前田 正直、私はご指名をいただいたときに驚きました。専門も近いわけではないので、なぜ私なのかと思いましたが、今、今の話聞いてよくわかりました。これは私にとっても大きな問題です。私自身もかつて同じ問題意識のもと、立命館大学の筒井淳也さんと「人文学・社会科学における質的研究と量的研究の連携の可能性」という研究会を行っていて、その成果は『社会学入門』（筒井・前田二〇一七）という教科書にまとめられています。あれから、状況はかなり良くなってきたのではないかと思っていんですけど、今でもそう

だったんですね(笑)。

田靡 そのときは、エスノメソドロジーによる研究は、場合によっては労働の研究というよりは、方法論の研究として聞いたほうが良いのかもしれないと思いました。

前田 難しい問題ですが、エスノメソドロジーは、実際に用いられている「人びとの方法論」を扱うというのが共通していればよいので、いわゆる連字符社会学(〇〇社会学のように個別的な領域を扱う社会学)的な問題にどの程度コミットするかは、研究者によって差があるのだと思います。その上で、問いのレベルについても少し踏み込んだ話ができてよいのではと思うところもあります。たとえば、こちらに『社会学評論』に掲載された田靡さんの論文「仕事の価値の布置と長期的変化」(田靡・宮田二〇一五)がありますが、読者の皆さんに、簡単に内容を説明していただいてもいいですか。**田靡** この論文では現代の日本社会における「仕事の価値」、つまり私たちは仕事のどのような側面や要素を重視しているのかについて、一九七三年から二〇〇八年までの量的データを使って論じました。私がやっているような計量研究では、集団のある特性に注目して、その特性が意識のあり方をどれくらい規定しているのかを分析します。この論文では、古い世代と比べて新しい世代では、たとえば「やりがい」のような、仕事に内在する価値を重視するという「世代の効果」が

ある一方で、一九九〇年代以降は、「でもそうは言っても、生きていくためには安定して稼げることが大事だよね」という「時代の効果」が顕在化していることを論じました。

前田 ありがとうございます。この論文で田靡先生がやっていらつしやる量的研究と、質的研究者が実際にフィールドワークを通じて「効率化をどう目指していくか」とか「やりがいをどう見つけるか」を発見していく研究は、「問い」の抽象度を一段上げれば、同じ地平に置くことができるものなのだと思います。計量研究を通じて「長期的なトレンドとして見えること」と、エスノメソドロジーを通じて「その都度その都度の実践として見えること」は、実際には一緒に考えられるところもあるのではないのでしょうか。「やりがい」のような内部価値に関する理論から、仮説を構成して実証的に検証する作業と、理論の中で用いられている「やりがい」のような概念を、実践に差し戻して再特定化していく作業とで、その連関を考えていけば、一見違う研究に見えても議論がしやすくなるのかなと考えています。

——質的研究と量的研究では異なる部分がやはり多いのですね。

田靡 これは個人的な悩みなんですけど、労働社会学や社会階

層論の計量研究では、労働条件や職業的地位のような客観的な要因については盛んに研究される一方で、意識や価値観の研究については、なかなか難しいところがあると感じています。計量研究で個人の主観的な世界を研究するのは、限界があるんじゃないかと。なので、最近は質的研究にも興味を持ち始めていて、質的研究をされている方から何かヒントが欲しいと思うことがあります。

前田 なるほど。計量研究に限界があると考えられていたのは意外でした。

田藤 ちよつと言いきたかもしれませんが（笑）。量的調査や計量研究で「意識」を捉えることが、アプローチとしてどうなのかと思うことがあつて。「意識」を測ることの難しさというか、それを統計的に分析するというのはどういうことなのかと。うまく言葉にできませんが。

前田 とは言っても、この論文においては、内部価値と外部価値について、かなりクリアに見えますよね。

田藤 全体的な、集計的なトレンドはクリアになっているのかもしれない。他方で、千人とか二千人とかデータを取ったとしても、計量分析のときには、一人ひとりのことは見えなくなつて、そのかわりに「古い世代」とか「男性」とか「大卒」とか、個人を構成する属性に切り分けられてしまうわけです。本来、一人ひとりの個別の世界であるはずの意識や価値

観について、バラバラになった属性ごとに分析するのは、おかしいんじゃないかと思うことがあります。

前田 確かに属性ごとに切り分けているという意味では、一人ひとりの個別の世界を記述しているわけではないかもしれませんが。ただ、それでも計量研究のもとで出された統計的な結果は、読者に受け取られることで一人ひとりに帰っていく、という側面もあるのではないのでしょうか。私も、一九九〇年代半ばに大学を卒業した一人として、当時就職活動をしてきた知人たちのことを想起しながら、論文を拝読しました。もちろん、そこで描かれているのは「集計的・長期的なトレンド」だと思うのですが、「やりがい」のような「世代の効果」と「安定」への「時代の効果」という説明は、大変腑に落ちるものでした。その上で、「実際に一人の人がどのように行爲したのか」を研究するためには質的研究という選択肢もあると思います。

田藤 少し話は変わりますが、フィールドについてはどのようにお考えですか。問いとフィールドは密接につながっているのが普通だと思いますが、エスノメソドロジーではどうなのかと思つて。前田先生の場合は、医療社会学のなかでの問いがあつてこそその医療現場でのご研究だと思いますが、そういう人ばかりではないですよね。

前田 それは非常に良い質問だと思います。私の場合は

「フィールド側から問いをもらおう」ことを重視しています。ただ、それをもとを辿れば、エスノメソドロジীর考え方に根ざしているのですよね。

田摩 フィールドに入つて、「これは良いデータだ!」というのは、どういうふうに判断するんですか。

前田 フィールドの参加者たちの志向が捉えられるようになれば、どういうデータが重要なかはわかります。フィールドワークしている際に「これは!」と思うこともあります。参加者たちの志向を出発点に考えていくと、問いを探すのに困りはしないし、良いデータも見つかります。ただ現実的なことですが、節目節目で論文化しなければいけません。論文にしたいものはたくさんありますが、十分な時間がとれなくて、それが困ることです(笑)。データもアイデアもあるけど、分析的に満足のいく水準にするのに非常に時間がかかります。

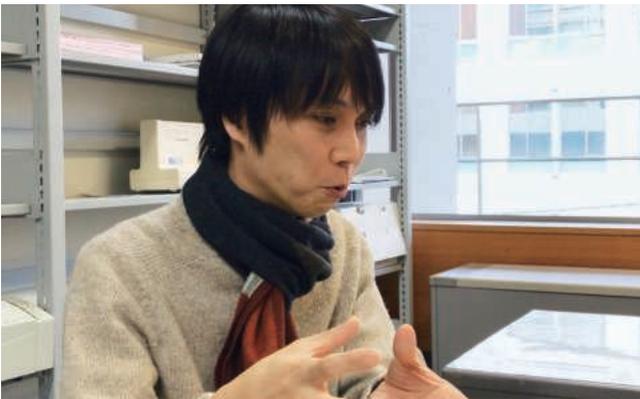
——この際ですから、そのほかに話しておきたい話題等ありますか。

田摩 質的研究における「分析力」ってどのようなものなのでしょう。フィールドのなかで、あるいは会話データと同じものを与えられたとしても、分析力のない人は見えな

いけれども、ある人には見えてくるのか、そもそも質的研究における分析力というのは統計分析のように訓練すればつくものなのか。

前田 難しい質問ですね(笑)。エスノメソドロジীর場合は、「実際にそこに参加している参加者たちが何に志向しているか」を把握するので、その参加者に合わせた分析が第一です。分析者の関心で決めているわけではない。そうした分析力という意味でなら、データ・セッションなどを通じた訓練は必須です。データ・セッションには、様々な異なったフィールドを持つ研究者が参加できます。

田摩 計量研究の場合、ある意味すごく明確です。問いが



先にあつて、それに沿つて調査を設計して、こういう手順でデータを集めて、適切な統計モデルを駆使して、こういう結果が出れば論文にできる、というように道筋がある程度決まっているし、訓練の仕方や評価の軸もシンプルだと思ひます。

前田 エスノメソドロジが複雑なのは、録音・録画データの分析と同時に、フィールドに入つてデータを入手してくるという側面もあることです。「どうやってフィールドに入るか」とか「どうやって関係を築いていくのか」というところまで含めて、調査力になると思ひます。人びとの方法論を探るにはやっぱりフィールドに入つて、そこで使われている知識を習得しなければならぬので。そうしたところまで合わせて「分析力」かな、と思ひます。

田藤 最後にひとつだけいいですか。授業で学生に自分の研究について話すときに、計量研究の魅力が伝わりにくいことが悩みです。数字やグラフを使って、こういう関連がありませう、こういうトレンドがありますつていうような事実を伝えるには良いのかもしれませんが、無味乾燥で面白くないと思ひます。他方で質的研究の場合は、いろいろなエピソードがあつて、学生は面白く聞かもしれないけれど、親しみやすさがある反面、変に誤解されたりだとかそういう危険性があるのかなと思ひます。学生に教えるときに気をつけてお

られることつてあります。

前田 なるほど。特に私が扱つてゐるトピックというのは、誤解されると困るタイプのトピックが多いです。倫理的な問題が絡んでくるような話であつたり、あるいは本人自身が当事者としての経験のもとで理解している部分に抵触するようなところがありうるものなので。こちらの言うことも理解してもらわなければならないけれども、同時にそこで、もしズレがあるようだったら教えてもらわなければなりません。そのようなことがあるので、とにかくリアクションペーパーを書いてもらつて、個別のやりとりをするのを重視しています。また、学生と向き合つてゐると、条件付けを理解するのが難しい場合がある、という印象があるんですよ。問いの置かれた文脈によつて答へつて変わるものじゃないですか。特に質的研究の成果の場合は、今ここで起こつてゐることがこうだからといつて、他のところでそれを無条件に一般化されると困ります。その点は危ういと思ひるので、条件付けの部分を繰り返し強調しています。その意味では、複雑なものを過度に単純にわかりやすく、面白くすることに、禁欲的です。

——興味深いお話をありがとうございました。

田藤 実は異動した先で計量研究をやつてゐるのがおそらく

私だけで、「質的研究の人ってわかり合えるのかな……」と不安だったのですが、今日、前田先生とお話できて少しだけ自信ができました（笑）。

前田 良かったです（笑）。

田藤 わかり合えるかもしれない（笑）。わかり合える方向で……（笑）。

〔文献〕

田藤裕祐・宮田尚子，二〇一五，「仕事の価値の布置と長期的変化

——『日本人の意識』調査の2次分析』『社会学評論』66（1）…

57・72.

筒井淳也・前田泰樹，二〇一七，『社会学入門——社会とのかかわ

り方』有斐閣。



退任教員対談③

生井英考先生×須永将史先生

教壇に立つこと——社会という なまもの 生物に向き合う目を育てる



——学部報では定年退職なさる先生方にお話を伺っているんですが、今回は助教の須永先生がご就職で退任なさるので、急遽、須永先生と定年退職の生井先生の対談企画になりました。よろしく願います。

生井 須永さんとぼくは「社会学原論1」という必修科目で楽しい苦労を共にした（笑）から、その話からしましょうか。いつから一緒にやったんだっけ。

須永 二〇一六年に助教として着任してからですとですね。丸四年間。

生井 春学期の「原論1」は一年生全体を三学科混ぜて三つのクラスに分けて、シラバスとレジュメなどの教材を共有して、同じ時間帯に三人の担当者がそれぞれ講義するわけですね。秋学期の「原論2」も同じ仕組みだけど、「1」のほうが共通部分も多くて、そのぶん縛りも強い。どうでした、率直なところ？

須永 大変でした。きつかったです（笑）。

生井 どんなふうにな？

須永 デュルケムもヴェーバーもジンメルも、自分が学生時代に読んだときはまったく違いますよね。人に教えるとなると教科書でキーワードだけ押さえるわけにはいかないから、すべて一から読み直して。例えば、四年間ずっと原論

の準備で鍛えられたような（笑）。特に最初の一年間は大変でした。

生井 その経験は、研究に影響しました？

須永 多くの専門はエスノメソドロロジーとか会話分析ですが、これらは、会話というデータを前に、発言順番がどのように交替しているかとか、行為がどのように交わされているかとかを扱う研究です。扱う会話はただの「おしゃべり」であることもあるし、医療診察場面であることもあります。こんな会話じゃなきゃいけないという制約はありません。

ただ、分析をするための概念が非常に専門的で、方法論を獲得するのにけっこう訓練と時間が要ります。そして、それなりに分析ができるようになると、今度は一種の科学主義というか、ともすればデータを科学的に分析するためのいろんな技術とか技法をただ適用するだけに陥りがちになるんですよね。高度な分析は会話分析者にとってはテクニカルに面白いことが多いんだけど、もっと広い枠組みでそもそも「会話という相互行為」を見るとはどういうことか、社会と社会学にとつてどんな意味を持つのかという部分への接続がないと、高度な分析であつても意義を明確化しづらい。その意義はやっぱり、社会学の古典への理解や、過去の理論家たちのアプローチへの理解に関わっていると思うんですよ。

生井 なるほど。「原論1」みたいな入門クラスはシニアの教

員が担当するのがいい、なんて昔は言われてたでしょ。全体をジェネラルに見渡すような科目は脂の抜けた年長者がいいと（笑）。

よく自身はそのシニアなわけだけど、須永さんたちと組んでみて、入門クラスを若手がやるのは大いに意味があると思いましたね。入門クラスは社会という生物なまものに向き合うための「社会学の目」を育てるところだし、学問は単なる研究だけでなく、教育も大きな比重を占める営みですからね。若手が本物の「学者」になるのにもよい経験ですね。

よくにとつて「原論1」はミルズのいう「社会学的理想力」を改めて実感する機会でしたね。彼は現代に必要なのは「ふたつ以上の学問分野にまたがる」ことだと言っているでしょう。いわゆる学際がくがいの勧めみたいなものですけど、学部の一学生にいきなり学際なんて言っても戸惑うばかり。だから、「社会学はこういうものだ」とアタマから説いて聞かせるのではなくて、社会学という学問のディシプリンとその成り立ちを、政治学や心理学や歴史学、人類学など隣接する社会科学や人文学との間に位置づけてあげる作業、という感じかな。

須永 先生はもともと人類学だったんですよ。

生井 慶応の社会学科の学生だったときに宮家準先生のゼミだったんですね。宮家先生は宗教社会学と日本民俗学の方ですが、イギリスのエドモンド・リーチという社会人類学者の

ところに二年間、研究留学なさって戻ってきた直後の学部ゼミ生がぼくらの世代。で、先生がまるつきり人類学かぶれしてた時期なので（笑）、ぼくも人類学とか言語学の本ばかり読んで、当時東大にできたばかりだったラテンアメリカ科の面々と研究会やったりとかね。

ぼく自身も儀礼に興味があつて、最初は祭祀組織とかをやってたんだけど、リーチはコミュニケーションを一種の象徴交換として捉えるので、だんだんと儀礼習俗を支える信念や意味の体系とか神話的思考のほうに向かつていった。社会学ではゴフマンの「ジェンダー広告論」が出たころですね。あの発想も一種の象徴交換として広告の言説を捉えるというものでしょう。

須永 ぼくの場合は哲学をやりたかつたんです。サッカーの日韓共催ワールドカップの年（二〇〇二年）に高校三年生で、周囲は国民意識の盛り上がりすごかつたんですが、ぼくはそれに乗れなくて（笑）。

生井 違和感があつた？

須永 はい。高校は福島なんですけど、教育実習に来た先生が哲学科の人だったので「哲学科に行きたいんですが」と言ってるような話をしたら「社会学がいいんじゃない？」と言われて。

そこで明治学院大学に入ってジェンダー論の加藤秀一先生

や石田仁先生に会って、ジェンダー論や社会学の理論的研究を勉強することの面白さを学びました。その後、加藤さんの勧めで会話分析の西阪仰先生のゼミに出て、理論的研究をふまえたうえで実際のデータに向き合うということの面白さを教えてもらいました。大学院の相談を西阪さんしたら、江原由美子先生を勧められて、首都大学東京の大学院に進学、という経緯で今に至ります。

生井 いい感じで社会学一筋じゃないですか（笑）。

——先生は一筋ではない？

生井 ぼくは瞑想ならぬ迷走型（笑）。

——ジャーナリズムの経験もあるんですね？

生井 いや、それは誤解があつてね。学生時代に『三田文学』という文芸雑誌の編集をしたんです。大学由来の文芸誌だけど、学生が小説を書くのではなくて、まったくの文壇文芸雑誌。巻頭インタビューに大岡昇平、埴谷雄高なんていう大家から吉行淳之介、安岡章太郎といった有名作家が並ぶ。芥川賞受賞前の中上健次さんにエッセイ書いてもらつたりとかね。仏文の先生が顧問についてたけど、実際は某商業文芸誌

の鬼編集長だった方が引退して、新宿の紀伊國屋書店のなかにあった編集部にふらっとやってきて文芸雑誌の心得を手ほどきされたりしてた。

——大学生のときですか。

生井 そうです。二年生と三年生の三年間。

——三年間？

生井 二年生を二回やったから（笑）。それで理系の学者だった父に激怒されました、学費を自分で捻出しなければならなくなつた（笑）。そこで出版社とか新聞社で数年間アルバイトしたんだけど、その話をどこかで話したことが誤解されたりしくて、ウィキペディアに間違いがたくさん書いてあります（笑）。

——そういった経験はその後の研究に影響ありますか。

生井 ドキュメント、つまり記録物への意識は特異なものがあるかもしれません。たとえば、編集で教わつたことのひとつに「対談を文芸評論に使ってはいけない」というのがあり

ます。対談というものは、編集の過程でかなり削られたり、その場では喋っていないことがたくさん加筆されていたり、ということが当たり前にあります。ところが文学をやっている院生や研究者はそういう暗黙のルールは知らないから使ってしまう。そういう経験をするよね、自分が手にする資料に対する意識が変わりますね。

——先生はアメリカ研究所の所長でもありましたよね。

生井 立教大学のアメリカ研究所は、日本の大学で最初に設立されたアメリカ研究の専門機関ですね。アメリカ研究という分野は「地域研究」といって、研究対象を国ではなく、社会や文化の成り立ちを含めた「地域」として総合的に捉えるアプローチ。その意味で最初から学際性が強い。

ただ、ぼくは最初はアメリカに特に関心がなくて、エスノグラフィの方法としての写真とか映像のことを勉強していく過程で、たまたまベトナム戦争の記念碑建設の出来事に遭遇してね。あの記念碑の建設は戦争の悪夢を鎮撫するための社会儀礼の様相を呈していて、まさに人類学的・社会学的なモノグラフィの対象だった。

で、そこから戦争政策の決定過程から文学作品に表された影響とかにまで涉って、いつのまにかアメリカ研究に深入り

することになったんです。

生井 ところで今日の話は須永さんのご就職というおめでたい話で始まったので、最後に抱負を一言。

須永 あのー、私の出身は福島県なのですが、震災以降、福島でフィールドワークをやるようになりました。そうした経



験をするうちに、福島でなくてもいいんですが、東京以外のところで地域に根差した教育といいますか、地域の若者とともに学んでいく面白さを見出しました。それで、いつかは地方の大学で社会学を教えたいなと思うようになりました。

今回の赴任先は福島ではないんですが、やっぱり地方都市なのでその意味で夢がかなったというか、そんな気持ちです。

——いいお話をうかがえました。ありがとうございました。

退任教員インタビュー

松本 康 先生

「実現不可能でも大きな夢を持ち続けてください」



日本の都市社会学を代表する研究者、松本康先生。三月でのご退任にあたり、学問との出会いや歩みを伺うべく、研究室を訪ねた。第一線を走り続けてきた松本先生から立教生への最後のエールは、やはりまっすぐな言葉だった。

——まずは、松本先生が社会学を始めたきっかけについて教えてください。

私は、東京大学の文科三類に一年間浪人したうえで入学しました。どうして「文三」を目指したかというと、歴史学を勉強しなかったからです。きっかけは、高校生のときの日本史の先生がマルクス主義史学の先生だったこと。授業で理論的に歴史の変化を説明してくれるのを聞いていて、これは面白いなど。

でも、大学に入って勉強をしていくうちに、どうも自分のやりたいことは歴史学ではないなと思いはじめました。大学で教わる歴史学って、たとえば日本史だと、古代史、中世史、近世史、近代史と縦割りになっていて、歴史の資料を読み解くような研究方法だった。そこで、「私はこういうのを考えていたわけじゃないな」と思って。むしろ社会の変化みたい

なものに関心があった。もしかしてそれは社会学かなということ、社会学に進学することを考えたんですね。

——松本先生といえば都市社会学ですが、初めからそれについて学びたかったわけではないのですか。

最初はとにかく社会の変化を知りたい、そういうところからでしたね。私はマルクス主義から社会科学に関心を持ち始めたのですが、そのなかでも吉田民人先生の『社会システム理論』が、非常に社会変動論として優れていると思ったんです。

それで吉田先生のゼミで社会システム理論をやっていたわけだけど、システム理論の講義ってすごく抽象的なんです。すこし不安な部分もあった。それでも卒業論文では社会変動の理論のような、抽象的な社会システム理論に基づいたものを書いたんですけど、大学院の修士課程に進むにあたって、これはとでもできないし、もうちょっと具体的な問題を扱いたい、と。そこで、社会全体をとらえるのは無理だから、社会を構成している一人ひとりの個人がどういうふうな社会に関わっているかという、関わり方のパターンを研究すること

を考えたんですよ。当時、「生活構造」という分野があったので、それに基づいて個人が集団に関わりながら自分の生活を組み立てている、そういうものを考えよう。

博士課程に進むにあたっては、やっぱり具体性というところで、調査をやる社会学に進みたいと考えていました。そんなとき、日本社会学会での発表がきっかけとなって、東京都立大学の都市社会学の研究グループと一緒に調査やりませんかと声をかけてくださったのです。それで都立大に出入りするようになって、最初は品川区で、都市社会学的な調査を始めました。

その後、名古屋大学からのお誘いがあって、専任の教員として勤務を始めました。二年目のときにたまたま海外研修に行く機会が回ってきて、約十カ月間シカゴに行って、現地へ授業に出させてもらったり、洋書を読んだりして、都市社会学の勉強を進めていきました。

——いつから「都市社会学者」になっていったのでしょうか。

そうですね、そういう意味では、名古屋に行ってシカゴにも留学して、つていうあたりからでしょうね。

やはり街の風景が変わったことは大きいと思いますよ。東京にいたときは、都市の社会学っていう意識があんまりなかったんですね。見渡す限り都市じゃないですか、東京って。ところが、名古屋に行くとか大都市なんだけれども、田舎と都市の境界線がはつきり見えている。たとえば、市の境を越えると急に田舎になるということがあるわけです。なるほど、都市である場所／そうでない場所や、都市像の違いなど、そういうのは、社会や生活に関係があるなと気づいたんですね。そこで、都市社会学の勉強をしようと思いましたが、名古屋の中心部に住んでいる人と、郊外の団地に住んでいる人と、もうちよつと田舎に住んでいる人で、ご近所づきあいだとか友人関係だとか、どこか違うのだろうかというような体系的な調査をやるようになった。名古屋は小さいけど大都市の要素をすべて備えているので、名古屋から学ぶこともたくさんありました。

——そんな魅力的な都市・名古屋から、再び東京に戻ってこられたきっかけは何だったのですか。

東京都立大学に都市科学研究科という独立研究所があるの

ですが、そこから来ませんかとお誘いの話があったんです。日本でも海外でもそうなんだけれど、名古屋ってあまり知られていない土地で、研究発表したときに、なんで名古屋の調査をしているんですかって聞かれちゃうわけ。私としては、名古屋大学だから地元の調査をやるのは当然だろう、と思うんだけど。それからアメリカ旅行していても、日本から来たと話すとき「東京から来たのか」って聞かれるんだよね。それくらい東京の知名度って高いし、東京で研究するのも意味があるのかな、都市研究者としては東京って魅力だよなって思ってた。

それに、都立大学というのは都市研究の拠点でもあるし、社会学科ではないけれども都市研究所もあり、他の分野の都市研究者とやるのも面白いなと思って。それで、一九九九年ですかね、結局名古屋には一二年間いたんですけども、都立大学へ移りました。

——松本先生の学生時代の話に戻りますが、学業以外ではどんな活動に参加されていましたか？

「セツルメント」をやっていました。一種のボランティア

活動ですね。私が大学に入った昭和四十九年頃はインターカレッジのセツルメントがたくさんあって、大きいものが当時
は亀有や川崎にありました。私は都営団地のなかの不良少年
ばっかりのところに行って、高校生相手におしゃべりする、
みたいな活動していました。

スポーツは、中学高校と軟式テニスをしていました。大学
ではやらなかったんだけど、短大のテニス部のコーチとして
手伝いに行ったりとか、そんな過ごし方をしていましたね。

——社会に対する問題意識の高い学生だったのですね。そんな
松本先生から見た立教大学の社会学部生の印象を教えてください。
ださい。

ゼミでの関わりからになります。ちゃんと調査できる力
を持っているな、と思っています。

というのは、二〇〇六年に立教大学の専任になって、最初
は学生にどのくらい力があるのかわからなかったんですね。
だから、普通の本を読むゼミからスタートさせたわけです。
それで街歩きみたいなのを企画していくうちに、「これはや
らせればちゃんとできるな」と思うようになって、調査ゼミ

に切り替えたという経緯があります。最初だけ力を持つ
ているのか分らないという状態から、ちゃんと調査をでき
る力を持つてるなと思うようになりました。

逆に理論的に考えるところはまだ弱くて、考えを煮詰めて
いく力はもうちょっとあってもいいかなと思っています。

——最後に、立教大学生へのメッセージをお願いします。

実現不可能でも、「大きな夢」を持ち続けてください。夢
だから、今すぐでは実現不可能なことでもいいんです。心
中にそういった夢を持っていることが重要だと思います。夢
を持ち続けて、すぐ実現できないからと焦っても仕方ないわ
けです。でも、長い人生の何かの機会にそれが実現できるチャ
ンスがめぐってくることもある。そのとき、夢を持っていな
ければそのチャンスがあっても反応できない。でも、夢を持っ
ていれば、ピンとくる。「これだ、今だ、チャンスだ」って。
だからやっぱり、夢は持ち続けた方がいいですよ、というの
が一つ、将来的なメッセージとしては言いたいことですね。

あとは、普段の生活に関して言うと、「自分で疑問を持つ
て自分で勉強する」ということですね。授業を受けていけば



それでいい、ではなくて、自分の問題意識を探して。だって、我々が教えていることって完成形じゃないんですよ。今教えていることは十年後には古い話になってる。だから、知識だけ学んでも意味がないんです。その知識がどう出てきたかと

いうことを理解して、どこに問題があるかを考えてほしい。結局、最先端の研究者はそれで満足していないから研究しているわけですから。それを考えていけば、あちこちにおかしいことがあるって気がつくはずなのね。ときどきリアクシヨンペーパーにもいい質問があつて、「それは専門家の間でも問題になっているポイントなんだよ！」ということがあるんだけど。疑問を持ちながら取り組んでもらいたいということが、日々の生活を過ごすうえでメッセージです。

——ありがとうございます。

(取材・編集 吉原 優人)

編集部だより

『社会学部報』の第三号がようやく校了の運びとなった。創刊準備号から数えると通算で四冊めということになる。

二〇一五年に教授会で提案し、「また酔狂なことを」という（一部の？）まなざしを感じながらも、当時の松本康学部長の後押しを得て、翌年に創刊準備号を制作。その後は毎年、担当教員も学生編集者もそのつど顔ぶれを変えながら、なんとか続いている。

今回は出版社で専門誌の編集者として働く卒業生にもコチ役を依頼して、なんとかここまで漕ぎつけることができた。

学部報をつくろうという発想は、もともと立教大学に学生新聞がないのを不思議に思っていたことに由来する。「立教スポーツ」はあってもそれ以外の学内諸事情を伝える媒体がない。東京六大学の

なかでこれは立教だけである。

実は大学新聞には当局（大学の広報課や学生課など）が発行するものと新聞部や学生自治会によるものがあるが、どちらもないのは立教だけなのだ。

これは淋しい話ではないか。

大学はそこに校舎とカリキュラムと教員団と学生集団と事務局があれば自然とコミュニティになるわけではない。大学は「学問を志す人間たちの共同体（コミュニティ）」だが、本当にそうなるには「俗世（シヤバ）」とは別世界」を意識し、かつ実践せねばならない。そう教わったのはアメリカの大学でのことで、それがな

いから——あるいは失われたから——昨今の日本における大学改革の迷走などというのも起こったのだろうと思っ

わゆる三号雑誌に終わるか否かはこの先の話である。願わくば見た目ばかりの「ソーシャル」メディアの時代に抗する「社会化」の場とならんことを。

（メディア社会学科教員・生井英考）

『社会学部報』、第三号をお届けいたします。ギリギリまで取材が終わらなかつたり、急遽新しい企画を立ち上げることになったりと大変な作業でしたが、ここまで来ることができました。関係者の皆様に深くお礼申し上げます。今号では原点到立ち返り、「社会学部」そのものにスポットを当てた内容を充実させました。教員や学生に直接取材をする今までのスタイルはもちろん、学部主催の映画の試写会に潜入したり、留学生にコラムを書いてもらったり、新しい企画にもチャレンジしています。社会学が大切に

してきた「多様性」の一片を、少しでも感じ取っていただけると良いなと思っています。学部学生はもちろん、他学部の学生、高校生、OB・OGその他にも多くの方々に社会学部のこの、延いては社会学のことを知っていただければ幸いです。

（編集長・大澤 崇仁）

ここをお読みの学生の方は、どうして社会学部に入ろうと思ったのですか。「抜く分野が広そうだから」「素直に面白そうだから」などが、周りでよく聞こえてくる理由です。私も「なんとなく」社会学部に入学しましたが、縁あってこのような雑誌の編集に関わることになり、まだに入り口にしか立っていないのに、社会学という広大な海の大きさに驚くばかりです。学部報を手にとってくださっ

たみなさんに「社会学にはこんな領域もあるのか！」と感じていただけたら、それは望外の喜びです。

（副編集長・日出 恵輔）

今回、編集に携わる上で、新しく貴重な経験を積むことができました。この学部報が社会学部の皆様の知識や教養、生活のお役に立てれば幸いです。取材に協力してくれた方々、先生、学部報の先輩方、本当にありがとうございます。

（編集部員・岩坂 なのは）

〈編集部員募集中!!〉

『社会学部報』は、学生による学生のための新しいメディアです。学年や経験問わず、雑誌作成に興味のある方、学生に伝えたいことがある方などは大歓迎です。興味のある方、話を聞いてみたいという方は、innode@rikyo.ac.jpまでメールを！

社会学部報 第三号 2020

2020年2月20日

編集長 大澤 崇仁

取材・執筆 岩坂 ののは
杉山 奈緒子
日出 恵輔
藤井 望愛
山本 彩水
吉原 優人
(五十音順)

編集協力 (株)現代書館 向山 夏奈

表紙・扉撮影 生井 英考
裏表紙撮影 五十嵐 雪将

印刷 望月印刷株式会社

〒171-8501

東京都豊島区西池袋3丁目34-1

立教大学社会学部

学部報編集委員会 監修



立教大学